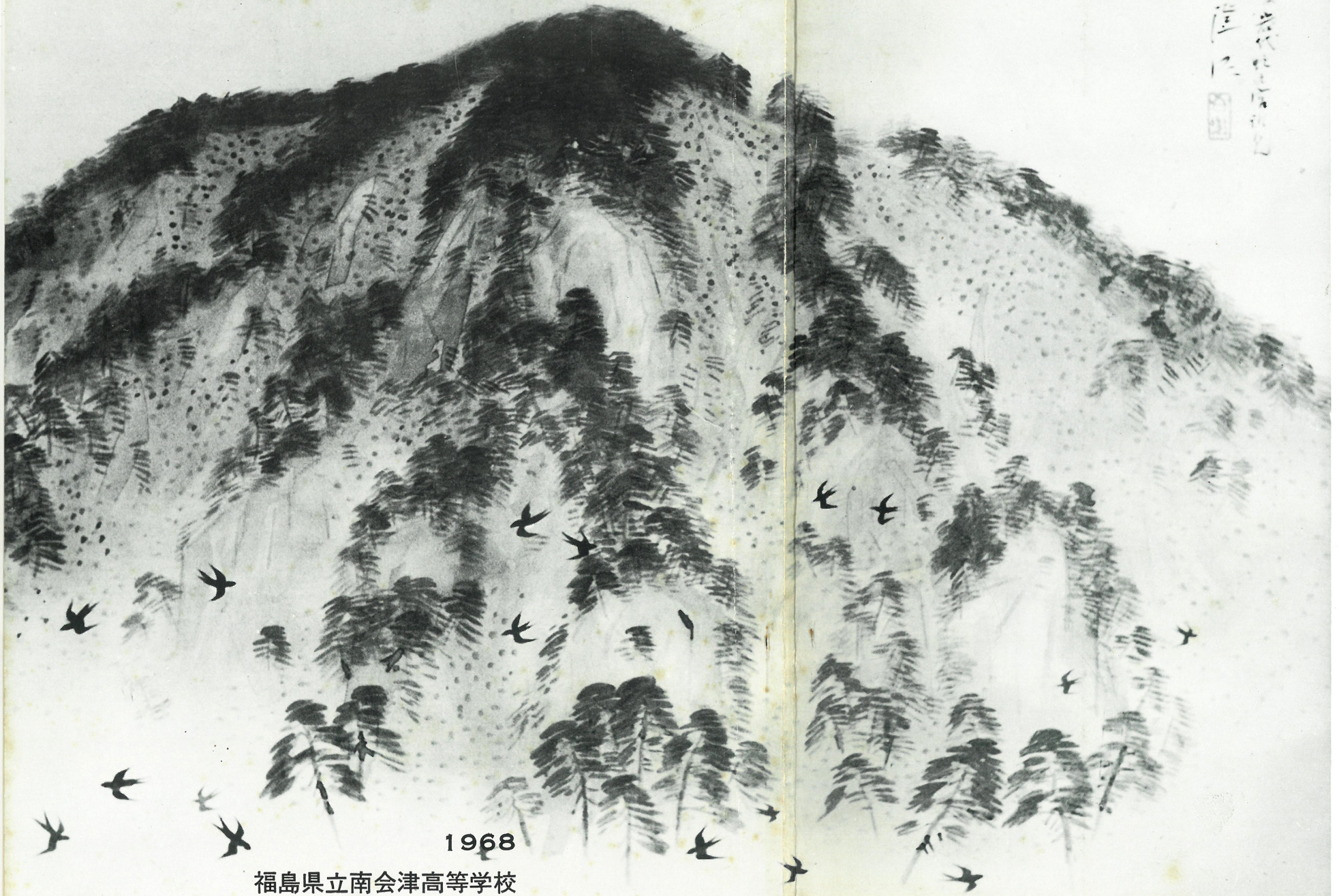


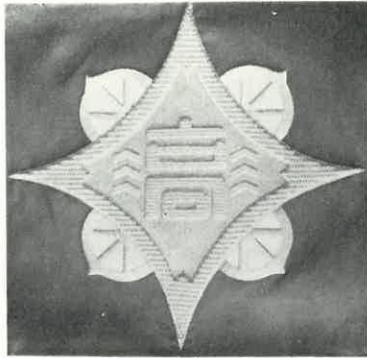
創立20周年記念誌



福島県立南会津高等学校
創立二十周年記念誌
白田 一
[Red Seal]

1968

福島県立南会津高等学校



明神嶽からの学校全景



南会津高等学校校歌

梁取三義 作詞
古関裕而 作曲

明るく力強く *mf*

やまなみ *mf* のは だーきよ くはれ

ゆくあしー た い *mf* な の せ せ らー ぎ み ず

すむとこ ろ *f* う ら け ゆ く さ と あ ら

たなぶん か み な *f* み み な み み な

みーあ い ず こ う と う が っ こ う

福島県立南会津高等学校校歌

梁取三義 作詞
古関裕而 作曲

一、山脈の肌清く、晴れゆく朝

伊南のせせらぎ、水澄むところ

展けゆく郷、新たな文化

南 南 南会津高等学校

二、幸多き大自然、尾瀬の高原

麓嶽に湧き出する雲

かかげる理想、花咲く文化

南 南 南会津高等学校

三、春の花若き歌、希望あふれて

錦繡の秋、しろがねの冬

正しき法を貫く文化

南 南 南会津高等学校



目 次

創立二十周年を迎えて.....	橋本秀夫.....1
学 校 沿 革.....	山内正司.....3
記念誌によせて.....	斎藤脩.....6
歴代学校長・PTA会長・同窓会長・後援会長.....	五十嵐友彰.....7
創立二十周年記念感謝状受賞者一覧.....	玉川春雄.....9
思 い 出.....	角田祥治.....12
学校の現況.....	野中憲.....14
現職員一覧・生徒一覧.....	菊地憲.....16
学校運営機構・特別教育活動組織.....	渡部次郎.....18
創立二十周年記念に際して.....	金川孝.....25
歴史を学ぶ意味.....	五十嵐文泰.....30
創立二十周年記念に際して.....	五十嵐正樹.....31
創立二十周年記念行事実行委員会名簿・編集後記.....	折り込み.....33
	校舎施設平面図.....



表紙は酒井白澄画伯
揮毫の明神嶽
界・近藤正智氏蔵

創立二十周年を迎えて

校長 橋 本 秀 夫

我が南会津高等学校は、今年七月三十一日を以て創立以来満二十年を経ました。伊南川の流れの悠久に比べれば、この歳月は全くの一瞬間にすぎませんが、人の世の移り変りをもつて見れば、二十年とは、まさに一時代を画すべき長い年月であります。終戦後の昭和二十三年盛夏、本校は富田中学校校舎の一部を借りて、県立南会津西部高等学校として開校し、以後伊南、館岩、朝日、伊北、大宮の各地に分校を置き、冬季は片貝、明和、檜戸、只見に季節学級を開設、当南会津郡西部地方に於ける最高の教育機関として、また地域文化発展のための大いなる拠点として、その活動を展開して来たのであります。太平洋戦争後、年を経るにしたがって国にも、この地にも漸次落着きもどり、地域の交通機関の発達と、経済生活の向上等の理由により逐年分校・季節課程は、一部は本校に統合され、一部は廃止となり、近年に至り一は独立校として発展を見、現在、生徒定員一学年一二〇名、男女共学の普通課程の高校となっております。開校以来、県当局並びに地元関係当局、及び住民より大きな愛護を受けて、本校は今日の成長を来したのでありますが、過去三度にわたる洪水による大被害は、本校教育の発展途上に幾多の困難を与えたのであります。しかし、

その都度、県当局と当西部地域よりの厚い同情と援助により、また且てこの学校に職をもった先輩教職員、在学した多くの生徒、卒業生諸君の努力によって災害の復旧を得、諸設備もでき、着々校運の進展を来し、希望に満ちた明るい学園として今日の姿をもつに至りました。記念すべきこの年に、本校に職を奉ずる私共、並びに在学生一同心から幸福を感じますと共に、このよき学園を育成して下された関係各位に深く感謝いたす次第であります。

本校は卒業生すでに二千十有余を数え、在校生三六一、教職員二三、学校規模の割に比して広い校地を有し、教育に熱意をもつ関係各位の理解と支持のもと、現在全校を挙げて、よき校風の樹立とよき人間形成を期して活動にいそしんでいます。

近年世界各国は高度工業化著しく、地球上の交通事情また急速に発達して、各国の共通利害一そう深い関係をもつに至ったため、いづれの国も争って自国の知能開発と、産業技術の革新に全力を傾注しているのであります。我が国も、青少年の教育、特に後期中等教育の改善には一そうの研究工夫が必要とされるに至りました。美しい大自然にかこまれ、教育環境絶好ともいべき我が南会津高校に学ぶ者、また教える人は、この記念すべき創立二十周年の年を迎えて、一段と心を新たに、各々自己の自分を自覚して努力精進、世の進運に力をつくさなければならぬと思うのであります。

学 校 沿 革

年 月 日

- 昭和23・7・31 福島県立南会西部高等学校開校(定時制)
 富田村立富田中学校に併置、伊南、館岩、朝日、伊北の各村に分校を併置。
- 26・4・1 明和分室を明和分校と改称。
 27・8・15 全日制課程設置に伴い、校舍増築工事認可着工
 27・11・3 伊北村を只見村と改称したため伊北分校を只見分校と改名。
 27・11・15 本校普通科(四室)増築工事完工。
 27・12・1 季節学級檜枝岐分室設置。
 27・12・1 片貝季節学級廃止。
 28・3・31 学校長玉川春雄退任(若松市立第二中学校長に補せられる。)
 28・4・1 県立大沼高等学校教諭西間木正己学校長に補せられる。
 28・7・15 明和分校短期農業科、家庭科開校入学式。
 28・12・1 季節学級館岩分室設置。
 29・4・10 本校、只見、朝日分校に短期家庭科開設。
 29・12・20 本校に水道工事完工。
 31・3・31 学校長西間木正己山都高等学校長に補せられる。
 31・4・1 県立富岡高等学校農業部長後藤次郎学校長に補せられる。
- 25・12・1 本校校舍落成し県に寄附採納となり新校舎に移転。
 25・12・1 本校校舍落成し県に寄附採納となり新校舎に移転。
 25・12・1 定時制課程季節学級明和分室開校。
 26・3・31 大宮分校を本校に統合。
 26・4・1 本校に全日制課程(普通科)設置、定員一五〇名。
- 25・3・31 館岩分校廃止(在校生は地理的条件と家庭の都合で全員退学)
 24・3・8 大宮分校開校、大宮小学校に併置入学式。
 23・12・1 季節学級開設(片貝、明和、楢戸、只見)
 23・11・1 大宮分校(定時制)設置認可。
 23・7・31 第一回入学式。
 23・7・31 富田村立富田中学校長玉川春雄学校長に補せられる。

- 33・3・31 学校長後藤次郎湯野中学校長に補せられる。
 33・4・1 県教委社会教育課指導主事近藤金弥学校長に補せられる。
 33・4・1 つつじヶ丘分校、朝日校舎募集停止。
 33・9・18 台風二二号で校舎一部、体育館、寮流出。
 34・3・31 伊南分校廃校。
 34・4・1 本校短期産業家庭科、只見分校定時制、普通科募集停止。
 35・4・1 只見分校、全日制普通科四〇名募集。
 35・4・1 南会津高等学校と改称せられ、南郷校舎と只見校舎となる。
 36・3・31 学校長近藤金弥福高等学校長に補せられる。
- 36・4・1 猪苗代高校より目黒嘉祐学校長に補せられる
 36・4・1 つつじヶ丘分校明和校舎農業科募集停止。
 36・4・1 つつじヶ丘分校、朝日校舎を廃止して在学四年生を明和校舎に転入す。
 37・4・1 つつじヶ丘分校農業科二〇名募集認可。
 37・4・1 南郷校舎定員八〇名となる。
 38・4・1 南郷、只見両校舎共定員一二〇名となる。
 38・4・1 学校長目黒嘉祐須賀川女子高等学校長に補せられる。
 38・4・1 安積高等学校より角田祥治学校長に補せられる
 39・4・1 只見校舎独立只見高等学校と改名さる。つつじヶ丘分校は只見高等学校に所屬。
 42・3・31 学校長角田祥治退職さる。
 42・4・1 安達高等学校より橋本秀夫学校長に補せられる。
 42・10・28 新音楽室完成。
 42・11・3 南会橋完成。
 43・7・31 寄宿舎浴場完成。
 43・8・31 体育館床補修完成。

記念誌によせて

創立二十周年を迎えるに当りて

P T A 会長
山内正司
創立二十周年記念行事
実行委員長

戦後二十年、日本は善くもこれまで復興し、成長をとげたものだと思ふに打たれます。南会津高等学校創立当時、私は翼賛団長のゆえを以て山口郵便局長、その他一切の公職を追放せられ、これからの日本はどうなるのかとひそかに心配して居たものです。

当時あらゆる物資の不足は極限に達し、生活は元より建設資材等も実に容易ならざるものがあつたにもかかわらず、我が南会津高等学校は善くも創立せられ、かつ現在の如く整備されたものだと思ふに感無量です。

教育基本法の制定による六三制の実施もあり、県当局の理解ある勇断もさることながら、ひとえに諸先輩の懸命なる御協力の賜であり、心からなる感謝の意を表したいと存じます。

二十年と申しますと、丁度成人の位置にある高等学校であると言えましょう。その間、昭和三十三年、三十四年の水害に見

舞われ校舎は水浸しになり、体育館は流失に逢う惨事を受け、

又最近に於ける水害等いろいろの試練を経て居りますが、体育館も近代的に再建せられ、校舎の増築、寄宿舎の開設、グラウンドの拡張整備等々一応御粗末ながら整いました事は非常に喜びに堪えません。然しこれ等の措置に対し、村並びに県当局の配慮の他に、陰の力として諸先生、P T A、生徒各位の勤勞奉仕に負うところ大なるものがあり、愛校精神に対し頭の下がる思いが致します。

今後の課題としては、冬期間の雪害による校外運動が不可能である実状からして、第二体育館（武道館）の建設が強く要望されて居り、その実現に総力を結集したいと存じます。又校舎も散漫狭隘であるので、なるべく早い機会に鉄筋校舎になることを希望して止みません。

本校は辺地校として、特に優秀なる教職員の確保は難しい問題であると考えますが、快適な生活を営み、一定期間生徒の教育に専念出来るよう住宅の整備、その他福利厚生施設の意を用い、物心共に優遇の必要があると思ひます。

本校は南会津西部の中心地に位し、校舎裏には伊南川の清流

し上げる次第であります。

創立二十周年記念に際して

同窓会長 斎藤 脩

がせせらぎ、空気が常に澄んで居り、実に環境はよろしい所と云えましょう。ただ積雪の多い冬期間、寄宿舎はあるといながらも通学する生徒の苦勞が思いやられます。伝統的に本校の生徒は質実剛健、良く学び良く運動をして居ります。又諸先生方も研究、指導に余念がないので、感謝と共に手放しで誇りを感じている次第であります。最近クラブ活動も活発であり、各種競技にも遠征出場し万丈の気を吐いて居ります。然しながら悩みの種は、遠隔地の高校だけに出場費がかさむので困つて居る様です。

創立二十周年、今や校門を後にして実社会に活躍して居る卒業生も大分多勢になり、あと十年もたてば、財界人として頭角を現わし政界、官界に名をなす方々も数多く輩出されることと思ひます。私は今からそれを何よりの楽しみとして待つて居ります。卒業生諸君、どうか郷里の為、母校の為大いに奮起して下さいませうと願ひ致します。

最後に地域の各位に御願ひ致したい事は、南会津高等学校は地方の最高学府であり、他の高校に進学出来かねる多くの方々が経済的に、しかも他校に劣らぬ本校を安心して利用出来るのでありますから、この学校を校風と共に立派に育て上げるよう特に関心を深め、御援助、御協力を賜りますよう御願ひ申

母校、南会津高等学校が創立二十周年を迎えたこと、私達同窓生としてもこの上ない喜びであり、誠に慶賀に堪えません。想えば、第二次大戦の傷が物心両面にまだ生々しい昭和二十三年、教育の機会均等という新憲法の精神に基き、我が地方に高等学校が設立され、まさに憲法の具現とも言えるように南会西部の隅々にまで多くの分校を擁し、地方の若い青年の殆どの者を受け入れて、南会西部高等学校として発足したのでした。以来分校の統廃合、只見分校の独立、校名変更、水害等、幾多の変遷を経て、しかも体育館・グラウンド・バックネット・寄宿舎等の設備拡充を得て、ここに小さくとも一校舎一校というまとまった形で二十周年を迎えられること、誠に感慨深く、また大きな喜びに堪えないと共に、この急激な変更、発展の過程に於ける歴代学校長の心勞、関係者の協力に対し深く感謝の意を表したいと思ひます。

こうした歴史をかえり見ると、経済的に高度な発展をとげた

現在の日本、我が地方の現状として当然といえばそれまでであるが、今在学している生徒は非常に恵まれた環境に於いて勉強ができるということをこの際深く慮り、学習に、運動に精いっぱい努力を惜しんではならないように思われます。この数年、学習面に於いてはもとより、運動面に於いてもハンドボール、バレーボール等、県下にその名を馳せているようで、誠に御同慶の至りに思います。我々同窓生としても、教育施設、設備のことはさておいても、後輩の学習活動、クラブ活動等に於いて援助の要のあることを痛切に感じてはおりますが、何と云っても学校が二十才を迎えた成人とするならば、我が同窓会は満十六才ということになり、未だ、社会的、経済的にも本当のおとなとはいえないといったところであって、この点、学校、後援会の多面的な御協力、御援助に対し、同窓会としても深く感謝の意を表したいと思えます。

今、我々同窓生は、各自それぞれの職場、学園等に於いて大成を期すべく、若いエネルギーを傾注している時であり、又、我々はそうすることが母校をおもうことであり、そしてそのことが母校の発展につながるものであることを確信致して居ります。

若い学校、そして情熱に溢れた若い先生方、開校以来その殆どが若い新卒の先生方ということで、そこに学んだ卒業生、学

ぶであらう後輩が、若く、そしてエネルギーに溢れた気風を育て、そのことが我が母校の一つの大きな特殊性を形造り、また一つの伝統とも言えるようになっていのではないでしようか。

若さとバイタリテイに充ち溢れる母校が二十周年を迎え、次の大きな飛躍への節としてこれを記念できることを喜び、益々発展することをここに祈念致します。

二十年を顧みて

後援会副会長 五十嵐 友 彰

戦後、平和国家、文化国家の二つをもって、日本国の精神的な大きな柱とされた。

その二大指標によって、教育の機会均等の大方針が打ち出され、有難くもこの南会津西部地区に初めて県立の「高等学校」を置くという幸せを迎えた。

今や、早くも二十年を迎えた次第で、これを心からよろこばぬ者はおそらくないであろう。

教育のことで久しく苦しみ続けたこの地域にとって、最高の高等教育機関なのである。ここで感慨を一しお深くすることが

三つある。即ち、一、生まれた、育った。二、家を持った。三、水害に会った、復興した。ということである。

元来無かった高等学校が設置されたのは、人間ならば誕生に値して大なる祝福であった。生まれて育ち、家なき仮住居から独立の校舎を持ったのは、まさに個人ならば一人前の晴れ姿であった。漸く一人前の形態を持つに到ったとき、幾度か重ねて大水害に見舞われた。

しかしこの三重大時も、地域ぐるみの涙ぐましい努力と、県、町村の適切なる施策によって、見事復興したのである。

ここで三重大時に身を挙げて大成に到らしめられた当時の村長さん、議会議長さんを初め、関係各方面には一層深い感謝を捧げたい。

以来、日とともに成長した高校でありながら、せっかくなつて下さった体育館ステージに引幕がない、威容堂々たるこの地の最高学府に校門がない、若人の躍るグラウンドにバックネットがない、南会津高校の魂の象徴ともいべき校旗がない等々、そんな姿に堪えかねて、菊地教頭さんが在任当時、氏の偉大な努力と相俟って初めて南会津高等学校後援会が発足した。そして会長辺見文助氏を陣頭に、会員および役員一丸となつて一つ一つ解決に取り組んだ。

今では、引幕も校門もバックネットも校旗もみなそれぞれ出上りがった。実に有難いことである。会員の皆さんにこの紙上をかりて心からお礼を申し上げる。

この事実は、識者の選ばぬ「自画自讃」を戒むる上からも敢えて誇張する考えは毛頭ない。

只、このようにして生まれ育ち、家を持ち、大災害を受け、一つ一つ克服できたこの足跡を振り返り、言い知れぬ感慨にふけりその上で、今から将来にかけて「みんなの根強い力を結集して、この南会津高等学校を育ててゆくのだ」と云う情熱を皆さんと共に燃やしたい。私は只それだけである。

病中の会長辺見さんの真意をくみ、私が代って拙なき回顧を録することを諒として戴けば幸甚無上である。

南会津高等学校よ、限りなく発展あれ。進展あれ!!

一、歴代学校長

代	氏名	就任	離任	在任期間	離任理由
一	玉川 春雄	昭和二三・七・一	昭和二八・三・三二	四年	若松市立第二中学校長に転出
二	西間 木正己	昭和二八・四・一	昭和三一・三・三二	三年	県立山都高等学校長に転出
三	後藤 次郎	昭和三一・四・一	昭和三三・三・三二	二年	湯野中学校長に転出
四	近藤 金弥	昭和三三・四・一	昭和三六・三・三二	三年	県立瑞高等学校長に転出
五	目黒 嘉祐	昭和三六・四・一	昭和三八・三・三二	二年	県立須賀川女子高校長に転出
六	角田 祥治	昭和三八・四・一	昭和四二・三・三二	四年	退職される
七	橋本 秀夫	昭和四二・四・一			

創立二十周年記念
式典感謝状受賞者

学校長より

星 渡部 堅文
酒井 藤部 一傳
芳賀 正百 雄博
山内 正智 雄
近藤 安彦 智
渡部 安次郎 彦
新藤 文次郎 章
山内 見太郎 助

二、歴代PTA会長

代	名前	任期	在任期間
一	近藤 正智	昭和二三・七月	一・八年
二	渡部 安彦	昭和二五・三月	二・二年
三	近藤 正智	昭和二七・三月	七・年
四	星 博	昭和二九・三月	四・年
五	近藤 正智	昭和三〇・三月	二・年
六	山内 正司	昭和四〇・四月	

三、歴代同窓会長

代	氏名	任期	在任期間
一	山内 太郎	昭和二七・七月	三・三年
二	山内 久男	昭和二九・八月	二・年
三	山内 太郎	昭和三〇・七月	五・年
四	齋藤 脩	昭和三七・八月	

四、歴代後援会長

代	氏名	任期
一	辺見 文助	昭和三八・五月

PTA会長より
同窓会長より

玉川 春雄
西間 木正己
後藤 次郎 彦
近藤 安彦 智
目黒 嘉祐 彦
角田 祥治 郎
五十嵐 文利 徳
菅家 泰
○印永年勤続十年以上

思い出

創立二十周年記念に際して

初代校長 玉川 春雄

戦終直後の学制改革は新制高校の誕生となり、本県にも昭和二十三年四月、七月に新たに七校が開校。即ち南会津、川口、猪苗代、信夫、船引、四倉、新地の各高校である。私は終戦後北京より引きあげ江川中学に奉職しておったが、二十二年度末、南会津担当の長沼幸一視学より、西部に高校を開設することになったので是非協力してもらいたいとの話があり、どうせ一度は死んだ身体であるからお役に立つならば……と覚悟を決め、取りあえず二十三年四月一日付で富田中学校長として赴任し開校準備にかかることになった。この地はかつて父が小学校長としてお世話になった因縁のある土地なので、親子二代におたる奉職も又意義あるものと考え、雪の駒止を越して山口の神庭忍三君の宿舎に一泊、現在の和泉田の中学に勇躍着任した。時の富田村長は星博氏であり、開校については多大のご協力を得た。私は当時三十四才の若輩であったが西部開拓という信

本校第1回卒業生記念写真（昭和27年）



念に燃えて、或は人につきあたり、何かと迷惑をかけた事があつたことかもしれない。今更ながら愧じ入る次第である。こんなことをしているうちに開校予定の七月三十一日がせまり、校舎の設定、教員採用、生徒募集等無より有を生じる苦しみを十二分に味わった。これらの問題は地域民の理解と協力がなければ到底実現出来ぬものであるので、折にふれ新学制の意義と高校設立のことについて、有識者をはじめ一般村民にPRし、その協力を得ることに努めた。それまでは特定の者のみが進学し、あたら能力がありながらその素質をのぼすことのできぬ向学の士が数多く残されていることも事実であつた。これらの諸君のためにも是非とも立派な高校を作りたいと考えたのは当然のことであり、その責任の重大さに改めて心のひきしまるのを覚えた。

ともあれ中学校の一部を仮校舎とし、校名も南会西部高校とすることに決定した。当初、定時制農・畜・家の三科としたが、別段施設設備があつたわけではなく一般的な課程として県内新設高校は大同小異の内容であつた。教員は富田中学の教員のうち高校免状のある鈴木孝二、玉川カヨ、私と三人で発足した。設備も施設も何もない高校なので、教員組織だけは立派な方々を招きたいと努力した。しかしこの点については在職五年

導も決して忘れ得ぬものがある。伊南の河原田、大宮の神庭、富田の斎藤、明和の星、朝日の小沼、只見の渡部の各村長さん。PTA会長の渡部安彦氏。校医の渡部次郎・トキ夫妻。明和の三瓶庄次郎氏、和泉田の五十嵐局長さん等、多くの人々の善意に支えられて何とか頑張った。その他いろんな方々にお力添えを頂いた。ここ二十年にわたる南会津高校の生々発展の歴史を眼のあたりに知る私にとっては、まことに感無量のものである。

西部に蒔いた種は今や脈々として大きく息づいている。そう自認し、又満足している。

第一回生の勉学の苦勞は、又その努力は到底筆舌につくしがたい。よくやった。私は彼等に十分な糧を与えることができなかった。しかしそれでも彼等は努力した。そのある者は立派な社会の一員としてその所に安住し、それ相応の仕事にあたつてゐる。一粒の種は社会の荒波にもまれながらなお大きくのびようとしている。開学の意義を今一度かみしめることは大きな意義があるものと信ずる。ここに二十周年記念にあたり往古御指導下された各位に深甚なる感謝を申しあげ、南会津高校の健全なる発展を祈念して筆をおく。

間一番苦勞した点であり、勤務地がへき地という悪条件も加わり、その人を得るといふことは仲々困難な問題であつた。分校開設はこの年以降になつたが、館岩、伊南、大宮、明和、朝日只見の六分校の校舎・教員についても同様の悩みがあつた。生徒募集についても本、分校とも定数を確保するだけが精一ぱいであり、高校教育の内容等についても半信半疑の者もあり、それ相当に苦勞が絶えなかつた。入試も学科試験の代りに校長が面接、中学校の成績、人物等を勘案して可否を決定した。

ようやく七月三十一日、前記星村長を只一人の来賓として中学校の一室で開校式をあげた。分校の指導運営も交通条件、教員の配置、本、分校の連絡等に多くの障害があつた。教員については五年間に七十五人の転退を処理し、又補充には足を棒にして、文字通り東奔西走した。その後独立校舎の新築、寄宿舎、分校の整備等それぞれ関係村の協力によって何とか形がつけられた。長い冬の分校指導、丈余の雪の駒止越え等泣きたい位だった。しかし若さにもを言わせ全身汗みどろとなり、あの山を越えた体験は、一生忘れ得ぬものとしてなつかしく思い出している。

それにもまして西部の各地で受けた交友の方々の友情、御指

よじりとすくめ

前校長 角 田 祥 治

五月さ中の日曜だった。昭和村までハイキングをしたことがあつた。界山の登り口で手拭いを落としたことに気付いたが、戻るのが癪なのでそのまま行ってしまった。雀色に暮れかかった頃同じ道を帰ってきた。界山を下りたあたりの道はたに、白い長いものがフワフワ春風にゆれていた。気味が悪かったが近づいてみたら真白い手拭いである。しかも〇〇高等学校創立三十周年記念という今朝私が落とした手拭いではないか。田植のため、わらび採りのため、或は一人で或は三人五人でこの道を今朝から少なくとも五〇人は通っている。手拭いが見つかるうなどと思つても見なかつたのに。薪を積んだ上の繩に片端をしばりつけて、よく見えるように広げて下げてあつた。私は南郷人の心に打たれた。この爺さんあの婆さんの一人一人に頭の下がる思いがした。それから四年間この尊いものに接して喜ぶ気持で暮して居た。丁度万葉の歌に接するような、詩経の詩に接するような――それは古典人にもあつて現実には存在しないと想つていた純朴なものを、現実に発見することができて、現実にある桃源郷の中で、古典人と語る喜びにひたりながら生活

した。そしてそれは現代文化の所産であるいかなる革新思想よりも尊い倫理思想であり、いかなる文化国家よりも住みよい社会構造であることに確信を持ちながら。

生徒がよかった——あんまり熱心に練習しているから運動場に激励に行くと、逆に脱帽して「ご苦労様」と頭を下げる生徒達だった。マナーがよくて根性があったから、県大会に優勝して東北大会で善戦するような部にもなった。国立大学も毎年合格して居たから、周辺の高校からは刮目され、校長まで肩身が広がった。

先生がよかった——一緒に運動をやった。山に登った。碁に誘った。麻雀に引張った。遊びに引張るばかりの校長だったが、仕事をよくやる先生方だった。徹夜でやった。頼まないでも気持を察して向うからやってくれた。会津、中通り、浜と散らばった今でも、集まったり行ったり来たりで、南会時代のそのままだ。大学出たての無色純粋が、自然の美しい人の心の美しい環境の中で、透明なまでに磨かれちゃったんだろう。

PTAがよかった。村長がよかった。議長がよかった——地域文化の向上は高校の育成にあると思っていた。高校のためなら何でも協力してくれるので控え目な要求しか出せなかった。金がない村だったが、出せない時は県議なり県になり働きかけ

私は本来田舎の生まれで純粋なつもりで居たのだが、南会に行った頃には「人を見たら泥棒と思え」に近くなっていた。ところが南郷生活四年で死ぬまで南郷精神を持ち続ける心構えができた。住居は郡山の真ん中にありながら駒止位な敷地の中だ。屋根の上まで全面葉っぱで瓦一枚見えない。市はずれの土地まで通って百姓をやっている。その上勤務先も農場なのだから朝から晩まで木と草相手である。持帰った伊南川石五〇〇個を庭一面に列べて得意になっている。

南会津高校の思い出

元本校職員 菊 地 憲

私が南会津高校に赴任したのは昭和三十六年の四月であった。

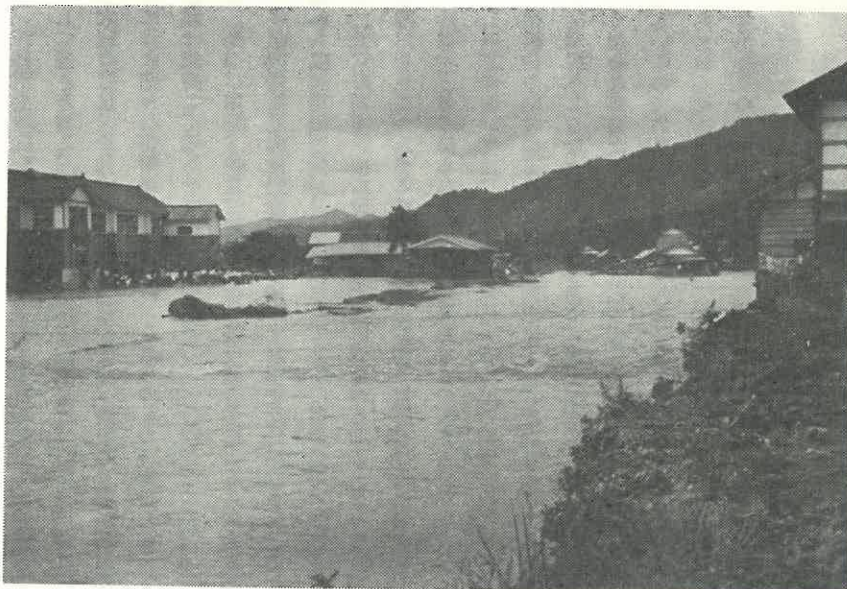
着任早々驚いたことが三つあった。その一つは前庭が河原同然であったことと、昭和三十四年の台風によって流されてしまったとかで、後任者の参考となる記録や必要な書類が全然残っていないかったことだ。次は四月九日にPTA会長等に案内されて和泉田の富田屋にゆき、二階で私の好物である川魚の御馳走をながめながら杯をとった瞬間のけたたましいサイレンの音で

て何とかしてくれられた。お蔭で体育館だ、特別教室だ、寄宿舎だ、運動場だというように、一年として建築工事のなかった年はなく、逐年充実に赴いた。精神的に社会的に校長の立場の楽なように、温かい援助をしてくれる点、都会などでは到底期待できない事のように思えた。

次郎医師がよかった——ぞんざいな口をきいて遠慮なく遊ばして戴いた。生徒に負けない童心の持主だ。南会津生まれでない南会津人だ。生徒のためなら損得がなかった。イデオロギーも道楽も一度も押し売りしなかった。飄々として対する人に肩をこらせない幅のある文化人だった。碁を打ちながら麻雀をしなから、剽軽な言葉で巧まざる校長教育をする真の意味の恩人だった。

自然がよかった——尾瀬は学術の宝庫で何度行っても学び尽くせない。燧、駒、浅草、それぞれに持ち味があっていいが、何と言っても朝日だ。深遼豪壮県下第一の難山だ。田代の裏側のあすなるの原始林、バキスタンあたりになりそうな川衣部落、味と言ったらきりがない。伊南川の冷たさは避暑地のものだ。緑泥片麻岩が好き勝手に採れる川など他にはないだろう。紅葉だった。高校前の山の鮮紅、駒止のあぶらこし、土湯峠にも十和田にも負けない色だ。

昭和34年の洪水 学校正門横から写す



ある。すぐ道路前の富田中学校が火事になったのだ。第三は挨拶廻りのため伊南村にゆき、有力者から「片貝の高等学校は廃校になるといふのだが、いつから只見の方に合併されるのか」と質問をうけた時である。なるほどそう思いこんでいたのか、昭和三十六年の伊南からの入学生はほんの二、三人に過ぎなかった。そんなところから、富田中学の生徒が大半を占める四月十日の入学式が火事のため、どうなるかと心配しておどろいたのも無理のないことであった。

在校生は勿論、入学して来た生徒達も、学校に対する不信と不安のためなんとなく動揺し、そわそわして落着きがなかったことは間違いないかった。

たしかに私が来た当時の学校内外の状況はこんな風であった。

「伊南のせゝらぎ、水澄むところ、展げゆく里、新たな文化」と生徒が歌う校歌にも、どこか哀愁があふれ、私の胸にせまるものがあった。

腰を据えてやるべきだ、と私に勇気を与えてくれる何物かがあった。遅いようだがやはり「新たな文化」の基礎となるのはこの学校である。この学校が立派なものになることが大切だと思った。

のである。

しかし、学校造りの過程には色々なことがあった。体育館増築に伴う地元負担金についても、県からは矢のような催促のあと、何日何時まで納付しなければ認可を取り消すという電話が来たのである。予定していた他村からの入金の見通しがつかなくなったので、PTAの決議により、当時の会長近藤正智氏、その他の役員の全財産を低当にして銀行より借り入れる準備をした悲壮なエピソードもある。

又電算から六万円で払い下げて来たジープの修繕費が一年に二十万円以上もかゝって、どうにもならないで頭をいためたこともあった。その他、土曜、日曜を利用して南郷の各部落、木伏から和泉田の乙沢まで、辺見文助老人とどここ歩いて後援会の組織作りにつけた、あのファイトはどういて忘れ得ない南会津の思い出として残ることであろう。

南会津高等学校が、今後益々発展してゆくことを御祈りすると同時に、学校復興のため御努力された人々の御健康と御繁栄を併せて御祈りして稿を閉じます。

西部南会津はたしかによいところでした。広大な大自然、そして透きとおる、あの清らかな水、人情のあたたかさ、湯の花、木賊の温泉、片貝山のあの石楠花の群生、詩を吟じながら月夜に歩き廻った伊南川の長い堤防、これらのものが背景となって私は気持よく働かせていただいた。

先づ、南郷、伊南、館岩、檜枝岐の連合体による「南会津高等学校増築期成同盟会」が昭和三十六年十月に結成され、それから復興増築運動が展開されたのである。県の急増対策による二教室の増築、次に理科室、それにつながる廊下、体育館の増築、それにつながる鉄骨の廊下、調理室、寄宿舎の増築、食堂、炊事室と毎年何らかの増築が行なわれたのである。

一方においては、PTA活動による校庭の勤労奉仕作業と、後援会の結成による設備の充実をはかり、校門をつくるなど漸次学校らしくなって来たのである。少しづつできあがってゆく全貌をながめながら勤めることのできるのには、何にもまして楽しいものである。たとえ、どんな苦勞がその過程にあっても、あとからは愉快なものである。私はこのように毎年増築される学校造りの中で五年間送ったのである。暮も将棋もマージャンもできない、魚釣しも下手だと笑う人があったかも知れないが、私の南会津の生活は心の安定した内面的な楽しさがあった

南会津高校在任中の思い出

元本校職員 野 中 恒 男

創立二十周年、本当にお目出度うございます。私が中学校に在学中、よく貴校野球部が檜沢中学校野球部と練習試合をしているのを観戦した頃に南会津高校を覚えたのですが、その南会津高校も二十周年を迎えた訳であり、その間幾多の校長先生はじめ諸先生方の御指導のもとに南会津高校が優れた伝統を築かれたことに敬意を表します。

私も本年三月までの二ケ年間はありましたが、貴校職員のお席をけがさして戴いたわけですが、今筆をとるといろいろの思い出が浮かんでまいります。それらを思いつくまま書かせて戴きます。

私は南会津高校着任以前は、小、中学校の義務教育校を三校程まわり、しかも遠く石川郡内からの移動であったので、南会津へくる時は「南会津山の中」といった空気が石川管内の先生方に強く、いろ／＼と御心配をおかけしました。しかし自分自身は只見と伊南に兄弟がおり、度々南会津高校の校門を通過しておりましたのでさほど心配はしておりませんでした。四月五日着任した時に見た県道に残る雪と肌寒さは今も鮮明に記

憶に残っています。そして、中通りと異なり、険しくそびえる山脈、怒濤のごとく流れる伊南川をみた時は「故郷南会の地に帰ったな」ということをしみじみと感じ身の引きしまる思いでした。

着任してすぐに、義務制学校と高校の相違を知らされたのは指導課を中心に校務分掌に大変な違いがあり、指導課生活指導を予想したのがたいへんその守備範囲が広いと言うことでした。先輩諸兄の努力に敬意を表しながらも、渡部、両鈴木先生等の御指導のもとに、連休の注意、一週間におよびる祭礼補導をジープに揺られながら夜道を事故もなく帰ったことなどが懐しく思い出されます。着任して間もなくの山菜採集は余りとれず、しかも驚いたことは、山菜採集の仕方などが上手でなかったことなどはいささか残念なことでした。一年目の三月の移動期には、娘の病気のことで石川へ帰っておったのですが、角田校長先生はじめ八名の移動の発表にあわてて帰校し、教頭先生を中心にいろ／＼と善後策などを協議して、橋本校長先生をお迎えに田島駅にまいり、堂々とした体軀とファイト十分な話しぶりに圧倒されたことも思い出です。去年一ヶ年間はありました。教師としての在り方など基本的な問題を再度考えさせられたのも橋本校長先生との出会いによるものであり、日常の努力

で心に残ることでしょう。

常に南会津高校では交通機関の確保と整備が問題とされるようですが、それなりに社会の世俗的な風潮への自然の岩の役割を果たしていることを決して忘れてほしくないと思います。生徒諸君が素直で明るく、先生の御指導を一生懸命きいて守って行こうとする姿は必ず実社会に巣立っても大いに役立つことであり、南会津高校の名声を高めることと思います。一方、橋本校長先生はじめ諸先生方も、生徒のもつ能力を充分に育てて行ってくださるものと信じてますが、生徒の学力と実態を充分につかみ、どのような方法で一層学力・能力を育てるかを具体的に考え、単なる学力の低さを嘆くのみでなく謙虚に反省しながら生徒に信頼される確固たる信念をもち研究しあう態度こそ地域の人々からも信頼されるものであり、そして地域の人々の物心両面による援助とがあわさり、その融合のもとよりすぐれた南会津高校の発展と伝統の高まりがあるものと信じます。

今日、南会津高校創立二十周年記念日に当り、これを契機としてより一層発展することを念願し、思いつくままに筆を走らせましたことをわびつつ筆をおきます。

と教師の職業の厳しさを忘れかけていた私にとってはよい薬で

した。それに、就職指導の経験も良い思い出でした。我々学生の頃は就職難だったので、余りに多い求人に戸惑ってしまい生徒との話し合いが不十分になりがちだったようで、現在でも就職した人からの多くの便りの中に職場への不満が書かれていると心苦しく感じるこの頃です。そして体育祭のあった翌日、台風来襲による床下浸水、寮・職員住宅の床上浸水は今でもよく覚えているものの一つです。早くかけつけたPTAははじめ地域の人々と、胸までつかりながら一致協力して水害にあたってくれた消防団、生徒の姿、そして水の去ったあとの地域の人々の御協力は今でも昨日のような思い出として浮かび、あの時の炊き出しのオニギリの暖かさは地域の人々の南会津高校への愛校心のあらわれだと思っております。地域の人々のこのような暖かい支援があればこそ、去年もたいした生徒による事故もなく、しかもものびのびと学校生活を楽しんでいる姿は、現在いろいろな批判を生んでいる他高校にはない美しさだろうと信じています。また、私個人としては、二年間恵まれた教師間の協体制のなかで、若い青年教師の方々のファイトに満ちた理論を聞いたり、四季折々、とりわけ冬の夜長に一夜「すがや」で談じ合いながら親睦を図ったことは、終生私の楽しい思い出とし

南会高二十年の思い出

校医 渡部 次郎

先日高校に一寸顔を出したら、農事研究会とかで若い連中が多勢集まっています。小生の顔を見てうわさ話をするようなので「何を話してんだ」と聞きましたら、「次郎医者はこの高校の記念物だ」と話してたんだとのこと。俺もとうとう物になったかとハゲた頭をなでましたが全くこの二十年間「主は変われど客は変わらぬ」でよく通いつめたと我ながら感心します。

私が校医になったのは昭和二十四年春で、年俸千五百円。もらった日に先生方の酒に化けました。本校、伊南、大宮、明和の各分校の身体検査をやり、朝日まで自転車で行ったこともあります。当時本校は和泉田にあり富中、富小、和泉田分校と同じ居しており、玉川校長夫妻は同校内に生活しておりました。当時のメンバーは剣道八段の玉川校長、柔道六段の山口教頭、その他美男子の林辺、桑原、星、オールドミス西村女史、須摩功獣医、鈴木数学等がおりまして華やかなロマンスもありました。生徒は毎日野球をしていましたが、殆ど大根切りバッターでした。数学がむずかしくて集団退校したのも第一回生です。国語は玉川カヨ先生の指導が光っていました。第一回の飛雲は

仲々立派な出来ぐあいで感心させられました。

本校が現在地に移ると普通科一回生も入るし、大宮分校も廃止され本校に生徒が集まり、先生の陣容も変わってきました。校舎は今の事務室より上の方だけで、校長室が今の宿直室のところ、今の校長室には家庭科の最上級生が4人いて篠崎君が大きな声で生物を教えていたのが今でも目に浮かびます。教頭は伊崎氏で朝から晩まで生徒をどなりつけていましたが慢性化して余り効果なく、時々落ちる星永二の一喝がききました。この先生は魚とりの名人で、春まだ浅き五月頃より伊南川にもぐり一べんに数匹のハヤをとり、フンドシのひもに二、三匹、口に一匹、最後に三十センチメートル位ある大きいのをヤス共々両手にしっかり押えて水から浮かび上る姿は、人間業とは思われませんでした。

名人のついでにその頃伊南分校主任で、あとで後藤校長時代に本校教頭になった山次氏はキノコ取りの名人で、昼休みにチヨコチヨコと明神岳にのぼってマツタケを五、六本とってきました。名前の通り山路を歩くのは本当に早かったものです。

スキーの名人は大田原先生で、会中より会高に二十二年勤めて停年後の講師で、蜜蜂を飼っていた英語の先生ですが、ベテランらしい上手なスキーでした。スピードのあるのは北海道出

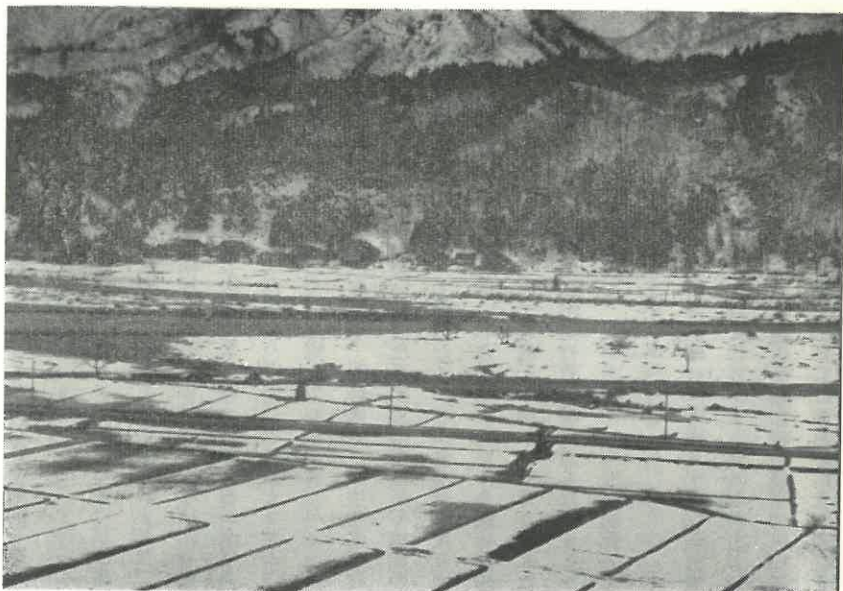
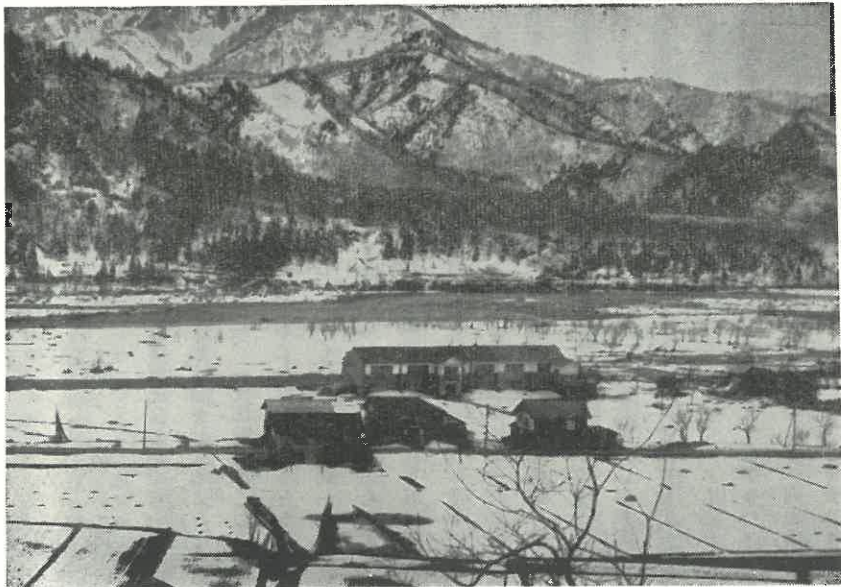
身の須摩さん。その中間でスピードとうまさは小生です。関根氏はミステリー小説を書いてました。

女先生には岩崎、酒井と二人おりましたが、美人の岩崎先生が一種独特のスタイルで、ススッと歩きましたのを、女生徒諸君も全部真似をして歩いて一世をふうびしたものです。

本校建物は戦時中に建てた水倉工場のあとだったので、古い水倉工場の三棟が未だ使われて、一棟は体育館（あとの水害で浮き上り、校内に引かかって真二つに割れてバラバラとなり流れ去った）、あとの二棟のうち一棟が男子寮、一棟が女子寮と教員住宅で暗いジメジメした建物でした。大便所は一回毎にお尻を早くあげなければならぬ程水が湧き出しており、隣の女子寄宿室の板カベにウジがいっぱいはい廻っているを見付けて校医の記録簿に書いたことがあります。

一分校にもあの頃はつわものが揃っており、全校の職員会等があるとぞくぞくとつめかけ、日帰りが出来なかったのでよく泊っていたものですが、半分は宿直室でドブロクを飲みつづけてゴロ寝、あと半分は小生宅で徹夜麻雀をしていたものです。水没前の田子倉部落に研修旅行に行き宿屋で大いにのみ、渡部政吉先生のところへ飲み直し、又あちこちとなりながら夜を明かしたのも良い思い出です。

昭和34年初冬の学校遠景



その中の作野氏は伊南から始まって一年づつ各分校を歩き、本校にも二年ばかりいた剣道五段の猛者でした。

当時は学校に自転車一台もなく、先生方は歩いて伊南や明和分校に出張授業に出かけたのですが、私が四千円也で宮床から中古の自転車を世話したときは大喜びで明和迄行くのに「トラックを何台抜いた」と自慢話をしていた篠崎、和田、舟木といったメンバーは、校長が二代目西間木先生になるとジャンパー、ハンチングスタイルが廃止され、ネクタイをするのに骨の折れた連中です。玉川校長に金魚のウンコに如くぞろぞろとついて飲み廻り、校門のところにカヨ先生が立って待っていられると「べんに酔がさめました。余りの生活にカヨ先生が逃亡を試みたことがあります。宮床のヘツリにぼんやり立っているところを追いついて戻っていただいたのも、上記三人の中の一入でした。

西間木校長時代になると世間も平安時代となったのか、校長先生から飲まなかった故か学校の空気も全く変わりました。西間木先生は温厚な人で、宴会の席ではニコニコしながら御酌をして廻りましたが、御自分は余りのまなかつたようです。ピアノを買ったとき私に電話をかけてくれ「次郎先生に初めてひかせ」と云ってくれましたが、私は全然駄目なので赤面の至りで

拒否する先生が続出した時代です。かく云う私も春になるとジッとしていられず、転任する先生と一緒に駒止をこえて遊びに出かけたものです。

それでも高校には次々と元気の良い先生方が新任で来て、三年で栄転し、めまぐるしく変わっていききました。ロマンスも生まれ山内力雄夫妻、園部夫妻、谷津夫妻のカップルが生まれたりしました。山内君は本校普通科一回生です。

後藤校長は土木屋校長で、グラウンドを作ったり、寄宿舎を作ったりして大いに活躍しました。

いつも次にやる計画を楽しそうに語っておりました。新しいグラウンドで南郷村の第一回の体育祭も行われ、それ迄、明和分校のグラウンドでしか出来なかつた運動会も初めて本校にもって来ることが出来ました。

次いで昭和三十二年近藤金弥校長がバットを二本持ってさっそうと赴任して来ました。その時は大量の移動で山次教頭、小林教務も転任しましたので、残っている若い二年目の三人の先生には学校の事が分る筈もなく、近藤校長が「この学校は何も出来て居りません」というのを恐縮して聞くより仕方ありませんでした。

近藤校長は野球の名人で春には中体連の大会を本校グラウン

でした。音楽の先生は富中の新保先生でしたが、よく居眠りをしておられました。

学校で飲む機会が少なくなると、スガヤが出来る迄は私の家がノミヤの代りをつとめ毎晩のように来て騒いでくれました。

この時代、今、日共本部に行っている小林君が五年ばかり居りましたが、その他野尻、小林、舟木といったところが全学連で活躍した連中で、生徒には別に赤っぼいことは教えませんでした。進学率は大へん良かったと憶えております。

新制大学が初めて新卒を出した年、福島大の一回生で紫田君が赴任して来ました。頭の良い純情な青年でしたので、旧制の大学や高専を出た人にまぎって苦勞しノイローゼ一号となりましたが、これを治療しようと思ひ、「趣味がないから駄目なんだ」等といって手始めにトランプを教えて楽しませようとしたのですが「ツーテンジャック」で他の教員が遠慮もなくマイナス札を紫田君が叩きつけるので、反ってノイローゼが悪化して郷里に静養に帰った事があります。

その頃、駒止峠は11月より5月迄はバスは通らず、転任も出張も一日がかりで歩いた時代なので、ノイローゼになつても無理ないと思ひます。小、中の女の先生が駒止峠の農家で泣いて吹雪の一夜を過ごしたり、針生で三日もカンズメになり赴任をドでやり、自ら球審をやりましたが、その野球知識と審判動作には全く感心しました。私が現在南郷の審判長をしていられるのも彼のおかげです。本校にも硬式野球部を作り自ら指導し、私を野球部後援会長にして寄付をつのり、バックネットを作らんとしたとき台風でグラウンドが流れ挫折しました。張り切っていた生徒も可愛いそうでしたが、近藤校長には全く気の毒でした。グラウンドばかりでなく体育館、寄宿舎も流されたので、生徒も明和に分断され悲惨な二、三年を送るわけです。

然しこの不遇な時代に体育の今野君がハンドボール部を創設し、前庭で良く練習し県体では常に二、三位の好成績を上げておりました。次いで加藤、三瓶と続きますが相変わらずの二、三位で未だ優勝出来ないのは残念なことです。

あと原稿用紙が一枚しかないので目黒、角田校長時代の近世伝は書けそうもないので、三十周年の頃書かせて下さい。読み返すと想い出が次々とあふれ出て眠れそうもない。書き落とし人も大分いるようだ。露悪趣味の強かつた星大昭(現館岩教育委員長)及び歌のうまかつたその夫人。碁、将棋、麻雀からオイチョカブまで上手かつた村上君。下つては同じく村田君、大人の大大久保教頭。小児麻痺等問題にせず魚釣りをし、最後に南郷一の美人を釣り上げて行った須佐君。当院に入院したこと

もあり、あとで美人の妻君を見せに来た五十嵐彰君。うちに下宿した事のある江畑君、Yシャツが一枚しかなかったなあ。渡部正、サクちゃん夫妻も入院した事があつた。蓬田という好青年もいて、結婚式に飯坂に私のため宿までとってくれた。スカイラインを一緒にこえた高橋君。

女教員では、佐藤教育長の娘の恒子ヤン、真田、万年、河原田先生。

一人えらいのを残していた。七年間もおつた竹島先生、よくのんだものでしたね。

あと近世の先生、書けなくて済みませんでした。あと十年待つて下さい。

南会高事務室二十年の思い出

校医 渡部次郎

初代事務長、目黒荒三。この人は気の毒な一生を終った人でも書きたくない。善人であつた。校長初め教職員のドブ洛克めに骨を折つた。

信子にフミエ。この二人は初代給仕と小使である。どちらが

れば夜中でも馳せ参じたそうである。(現会津短大)

三代目事務長 渡部清美。デブプリした風格のある人で近藤さんに仕えた。観音原に住み、小学生が高校の校長と思つたので観音原の校長先生と呼んでいた。酒を愛しあとで中氣になつたと聞いております。

菅家利徳。小使いであつて可愛い美少年だったので、事務長や先生方から「トシ坊、トシ坊」と呼ばれていたが、今や菅家コンツェルンの親玉であり、先生方は下宿、食糧、借金の世話迄なので「菅家さん」と呼んでいる。

サクちゃん。官床の生まれ。お父つあんと初めて学校に来たときは、背の低い真黒い顔をしたオカッパの子供であつたが、二、三年であはやかになり、見事美男で似合いの渡部正先生にほられれ今では二児の母となり、郡山で幸福な生活を送つていられるとか。

四代目事務長、渡部貞夫。遊び好きだが仕事の切れる人です。よく喜芳さん、菅家さん、竹島先生と事務室で基会をやつていた。酒も好きで事務室一同で芦の牧に遠征し青くなって帰つて来た事もある由。(現喜多方高事務長)

佐藤集君。中大出で福島県職員試験に合格して喜んで来たら南会高に廻されたといつてガツカリしていた。同じ時に美人の

給仕で、どちらが小使か忘れた。共に家庭科一回生であり定時制であるから生徒の時代から勤務していたのである。信子は美人であつたので、先生の靴下一つ洗うのにも気を使った。ヤキモチを焼かれたり、うわさされるからである。梁取出身だったので高校教員の梁取行きが大分目立つた。

フミエは定時制を終えたと事務員に昇格し、給仕にはカズがなつた。二人は西部連合の体育大会では百米一、二位のコンビであつたが、この頃はつかれてたのかガニ股で歩いてた。

信子と和は早く結婚した。売れ残つたフミエは私の仲人で田島税務署員と結婚し、今では東京の国税庁官舎でデラックスな生活をしているという。

二代目事務長、五十嵐文泰。今のブンタイさんであるから何も云うことはないが、現在の彼は盲啞学校、田島高事務長をつとめ上げた、即ち武者修行後の事務長である。

五十嵐喜好きさん。仲々の好々爺で長年若い人、特に初歩の暮打ちの指導をした。昔は酒をのんでくせが悪く、これ又、酒くせの悪い先生に雪の上に放り出された事もあるという。十何年もつとめた管である。

辺見修一(文)の息子で文助修で通つていた。中々仕事が切れ、麻雀が好きで、下手だったがメンバーが足りない時電話す

事務員が新任になってきたので、若い先生が用もないのに事務室に盛んに出入りするので「無用の教員の出入を禁ず」という張り紙を出してきらわれた事がある。彼女は一ヶ月で只見に、彼は一年で県庁に栄転し、今では相当えらい役人になっていると役員吏員は云つております。

芳賀清光。彼女と交替に只見から来たフアイト満々の好青年で職員野球メンバーにはかかせなかつた。補手をつとめた。

(現会津短大)

遠藤某。よく飲んだ口だが大した話もない。

五代目事務長、五十嵐文泰。省略。

笠間貴美子、渡部玲子。笠間さんが猪苗代、渡部さんは八田の生まれで会女出身。笠間さんは大柄、玲子ちゃんは小柄、美人だったかどうかは良くおぼえていないが、あの特徴ある笑声だけは忘れることは出来ない。貴美子さんが猪高栄転のあとに玲子さんが来たのだが、これも二年で若女に栄転。文泰事務長をして「せっかく仕事をおぼえろと転任されてしまう」となげかせたそうである。

まだまだありますがこのへんで終ります。

現職員一覽表

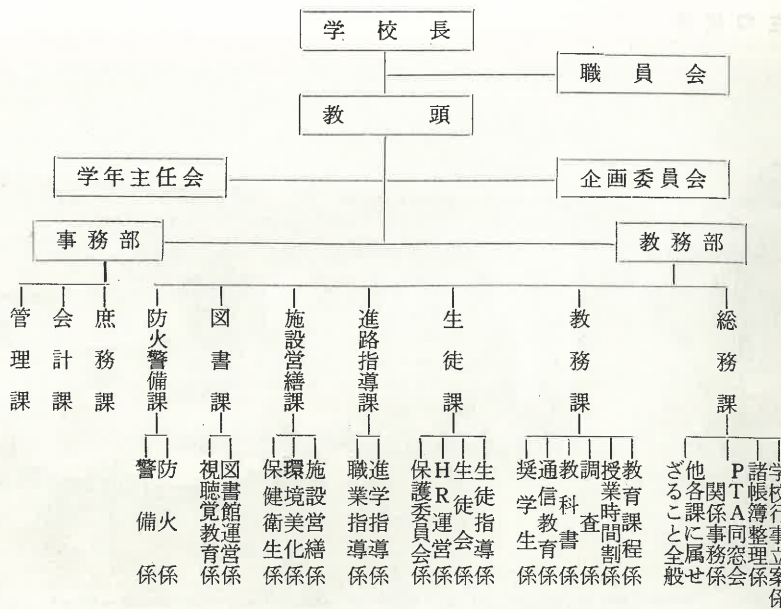
学校の現況

職名	氏名	年令	最終學歷	免許教科	就任年月日	生徒活動	担当	校務分掌	出身地
校長	橋本 秀夫	五六	日高師大	英語	昭和三〇・四・一				長沼町
教頭	金川 孝四	四二	北福島大	英語	三〇・二・一				会津若松市
教諭	山内 博允	三二	福島大	理科	三〇・四・一				南郷村
教諭	鈴木 康弘	二八	日体大	体育	三〇・四・一				白河市
教諭	三瓶 昌久	二五	福島大	体育	三〇・四・一				福島市
教諭	山口 竹郎	二六	北九州大	英語	三〇・四・一				新鶴村
教諭	金沢 厚四	二四	国学院大	英語	三〇・四・一				いわき市
教諭	後藤 言行	二五	北福島大	理科	三〇・四・一				札幌市
教諭	栗城 信雄	二四	都留大	英語	三〇・四・一				金山町
教諭	長谷川 久仁子	二四	明治大	英語	三〇・四・一				塩川町
教諭	小熊 千代一	二三	福島大	英語	三〇・四・一				田山町
教諭	渡部 仁男	二三	新潟大	英語	三〇・四・一				郡山市
教諭	菊地 昌美	二四	東北大	英語	三〇・四・一				伊達町
講師	富田 良夫	二四	立命館大	社会	三〇・四・一				喜多方市
講師	山口 啓輔	二四	明治大	商業	三〇・四・一				福島市
講師	齋藤 和夫	二三	山形大	音楽	三〇・四・一				保原町
講師	浅野 嘉尚	二三	福島大	数学	三〇・四・一				南郷村
講師	酒井 良幸	二九	昭和薬大	理科	三〇・四・一				南郷村
事務補	五十嵐 文泰	四八	高小		三〇・四・一				南郷村
事務員	利助 二〇	田高			三〇・四・一				田島町
事務員	目黒 計江	二〇	南高		三〇・四・一				南郷村
事務員	菅家 利徳	三七	高小		三〇・四・一				南郷村

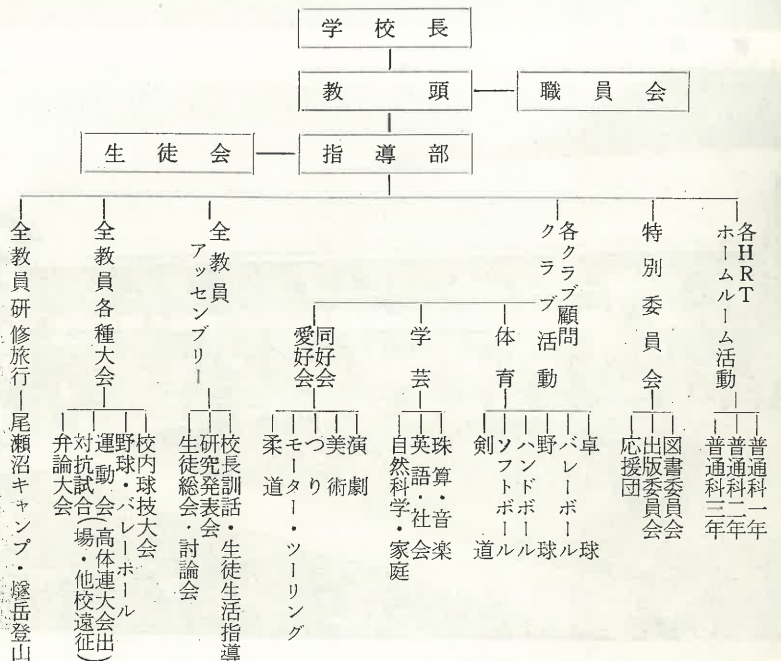
学年	学級数	男	女	計
I	3	52	75	127
II	3	61	55	116
III	3	58	60	118
計	9	171	190	361

生徒一覽

学校運営機構



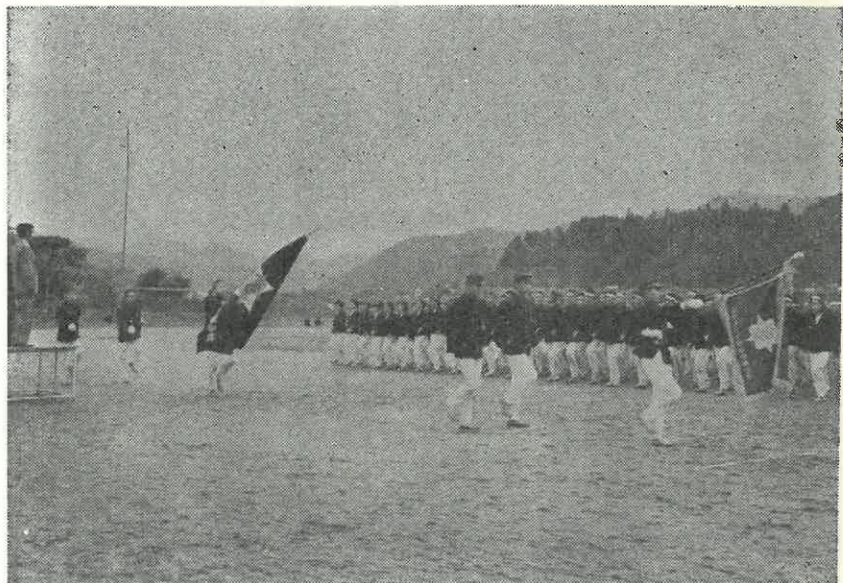
特別教育活動組織表



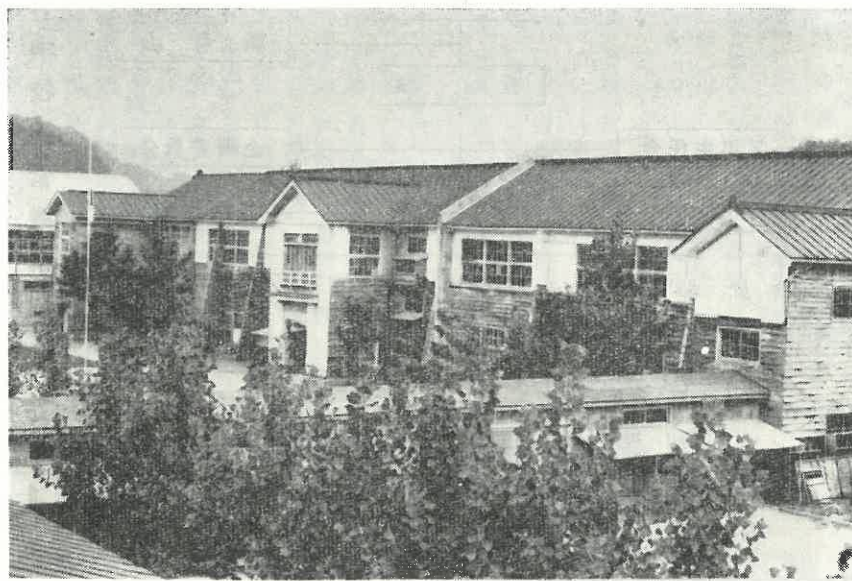
英語劇のカーテンコール（昭和42年）



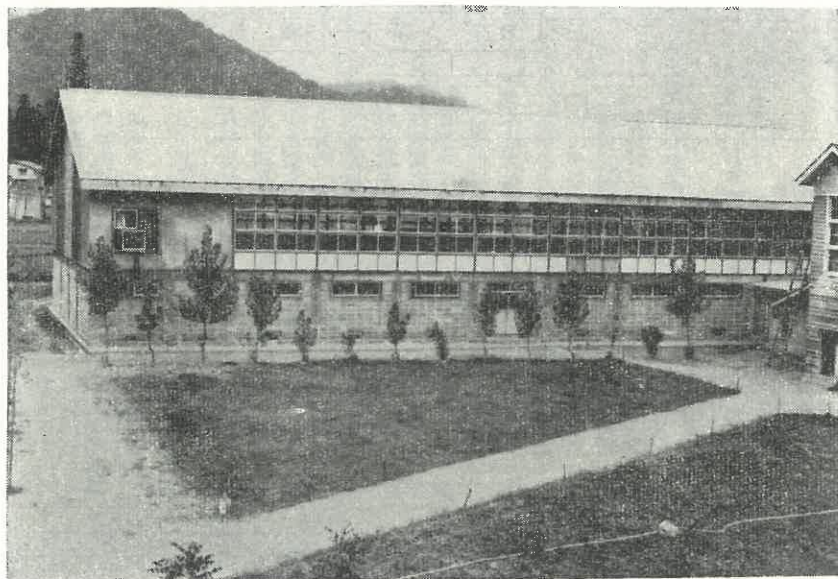
体育祭校旗行進（昭和41年）



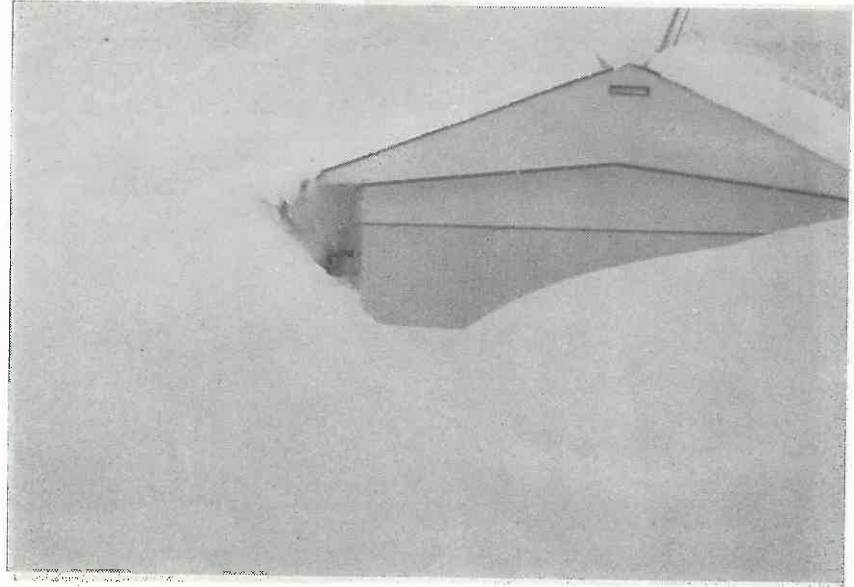
現在の校舎



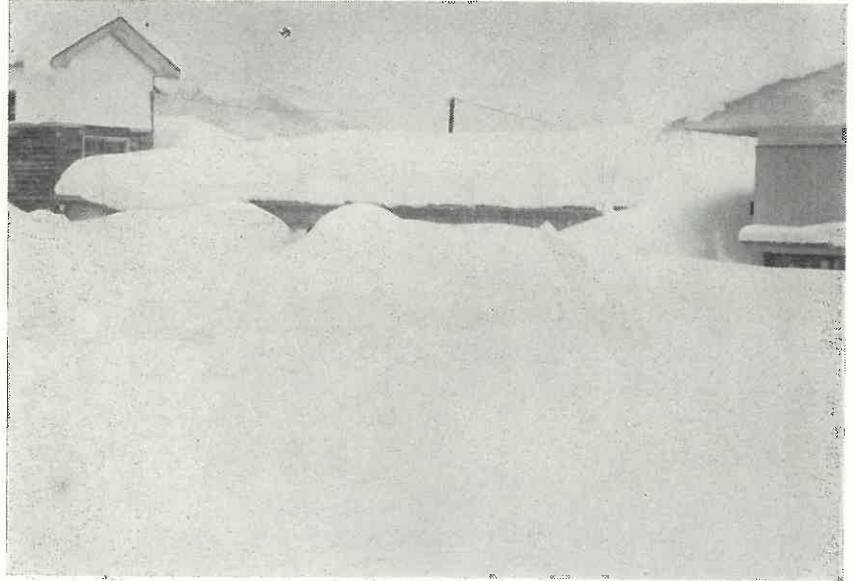
体育館



雪に埋った音楽室(昭和42年)



雪の北渡り廊下



創立二十周年記念に際して

教頭 金 川 孝

真ん中を走る三本の線は伊南川、それをかこむ四角は南会津の峯々、四つの葉は清楚な白樺の樹々、これらを組み合わせる出来ているのが我が南会津高等学校の校章である。それをじっくりと見ているとなんだかどこかの旧制高等学校の校章を思わせる趣がある。南会津高等学校はこの校章の象徴する自然環境のまっただなかに二十年間生きつづけてきた。豪雪にも豪雨にも負けず。これはただ事ではない。

二十年間南会津高等学校の果たしてきた役割は偉大であった。これを設立し支持してきた人々の心意気は立派であった。これは鎌倉の豪族河原田氏の血脈のしからしむところであろうか。二十年間たつて南会津高等学校はこの山国にしっかりと根をはりめぐらした。これから天にむかって隆々と成長していくだろう。

ここにつとめる者の情熱、学ぶ者の純情、これをとりまく人々の真心、これらが渾然ととけあうとき、この山国に素晴らしい学園が築かれる。南会津高等学校はこれからの高校である。

歴史を学ぶ意味

事務長 五十嵐 文 泰

食べないものの味を知った人はなく、見ない人を好きになつた人もない。これがために教えるもわからない、そして教えられても聞けないことがある。

そこで人は自ら経験して覚えること、共に歴史を学ぶことが必要となってくる。

本といい、学問というのも、人々の経験の結果を記録したものに過ぎない。そしてそれを読む、所謂読書というのは経験を通じた人間の歴史を読むことである。

人には年令によってそれぞれの歴史があり、家には先祖からの歴史がある。国民として、国の歴史を学ぶことは、国の主権者である自己を知るとともに、経国の道を知ることとなる。

今こゝに南会津高校二十周年を迎えるに当り、その沿革に目を向けることは、未来を作るために大事なことである。

創立二十周年記念に際して

生徒会長 三年 五十嵐 正 樹

二十年前といえば、まだ私達などはこの世にあらわれていないずっと前の話である。今はもう立派になられ、お父さんやお母さんとなっておられる先輩達が、当時やはり坊主頭とおかつぱ頭で勉強しておられたのと同じ教室で、その頃無の状態であった私達がこうして二十年たった現在同じように勉強しているというのは、考えてみれば、時の持つ面白いめぐりあわせとも感じられるのである。

しかしなんといっても本校が、健全な人格を養うことを目的に創立され、この地区の最高学府としてこの地区に与えた文化的影響は大きい。

もしこの地区に本校がなかったら、高校生となりえた人はずいぶんと少なかったことだろう。この点、本校が存在することによって若い時代に高度な教育を受けることができた人が多勢いるということは、この地区の発展にも大きく関係している。

そしてまた美しい大自然に囲まれ、すばらしい環境のもとで施された教育というのは理想の教育であり、その教育を受けた先輩が立派な社会人となられていること、又現在、我々がうけていることはほんとうに誇りとすべきところである。

しかしながら、本校の歴史をかえりみるに、よく指摘され反省されてきたが、そうしたすばらしい自然の中で育つ心、よく言えば「純真素朴」というけれども、ある面から言えば消極的で自分の意を出さず人のなすままに動き、真なるものを考えようもしない心があるということも否定できないのではなからうか。このことなどは、本校にとって二十年以来の大きな問題であろう。もちろん地域性ということもあろうが毎年毎年さげばれているのに、それでいてそれほど進歩を見せていないということはどういうことなのだろうか。ただただ奮起する以外にはあるまい。このことが解決され、「純真素朴」で活気が満ち、若人の声が高らかにこの谷間にこだまするようになれば、これからの本校の歴史はずいぶんと変わったものになり、一段と飛躍をみせるにちがいない。

美しい自然ばかりかと言えば、さにあらず。水害なども度々あったということは聞き知っている。しかし、そうした災難にも負けず現在のような立派な形にまでたち到っていることは、私達としては感謝の念でいっぱいである。

今、創立二十周年という年にあたり、その歴史をふりかえてみると、二十年間に築かれた伝統を守らなければならない責任の重さがあらためて感じられ、また私達はより以上に大きく前進しなければならぬことが感じられてくる。

歴史は、時とともに移りゆく。そして南会津高のそれも……………

しかし、まだ若い。二十歳、二十歳の南会津高は、まだまだ若いのだ。これからののだ。



創立二十周年記念行事実行委員会

編集後記

委員長	山内正司 (PTA会長)
副委員長	斎藤脩 (同窓会長)
〃	五十嵐国一 (PTA副会長)
〃	山内啓示 (〃)
〃	馬場留佐 (〃)
〃	五十嵐友彰 (後援会副会長 会長代理)
委員	辺見優 (PTA評議員)
〃	大東文弥 (〃)
〃	大竹要太郎 (〃)
〃	橋本秀夫 (学校長)
学校側委員	金川孝 (教頭)
〃	五十嵐博文 (事務長)
〃	山内博允 (教諭)
〃	鈴木康弘 (〃)
〃	山口竹郎 (〃)
〃	山沢厚四 (〃)
〃	小金沢千代一 (〃)

開校以来、常に激烈なる自然条件と地域性が傍にある一方、根強い教育への意志と熟意とがあった。冬期間の三メートルに及ぶ積雪、三度にわたる洪水等、幾多の困難を克服しつつ歩んできた南会津高校も、ここに二十歳の夏を迎えた。その間、先輩教職員の方々、及び関係各位の御苦勞は並大抵のことではなかったものと拝察される。

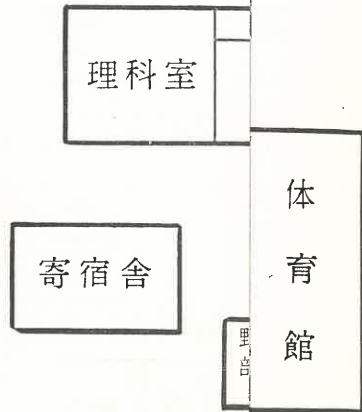
この記念すべき冊子を編むに、本校二十年間の姿を伝え得ぬ編集子一同の非力を寛恕せられ、なおかつ、この冊子を本校の歴史を顧みる一助とすることを諒とせられるならば、編集子一同の喜びとするところである。

最後に、繁多な折から玉稿を寄せられた方々、貴重な写真等を寄せられた方々へ深甚なる謝意を表するとともに、期日等の都合により掲載割愛のやむなきに至ったむきもあることをお詫び致します。(編集責任者・金沢厚四)

創立二十周年記念誌

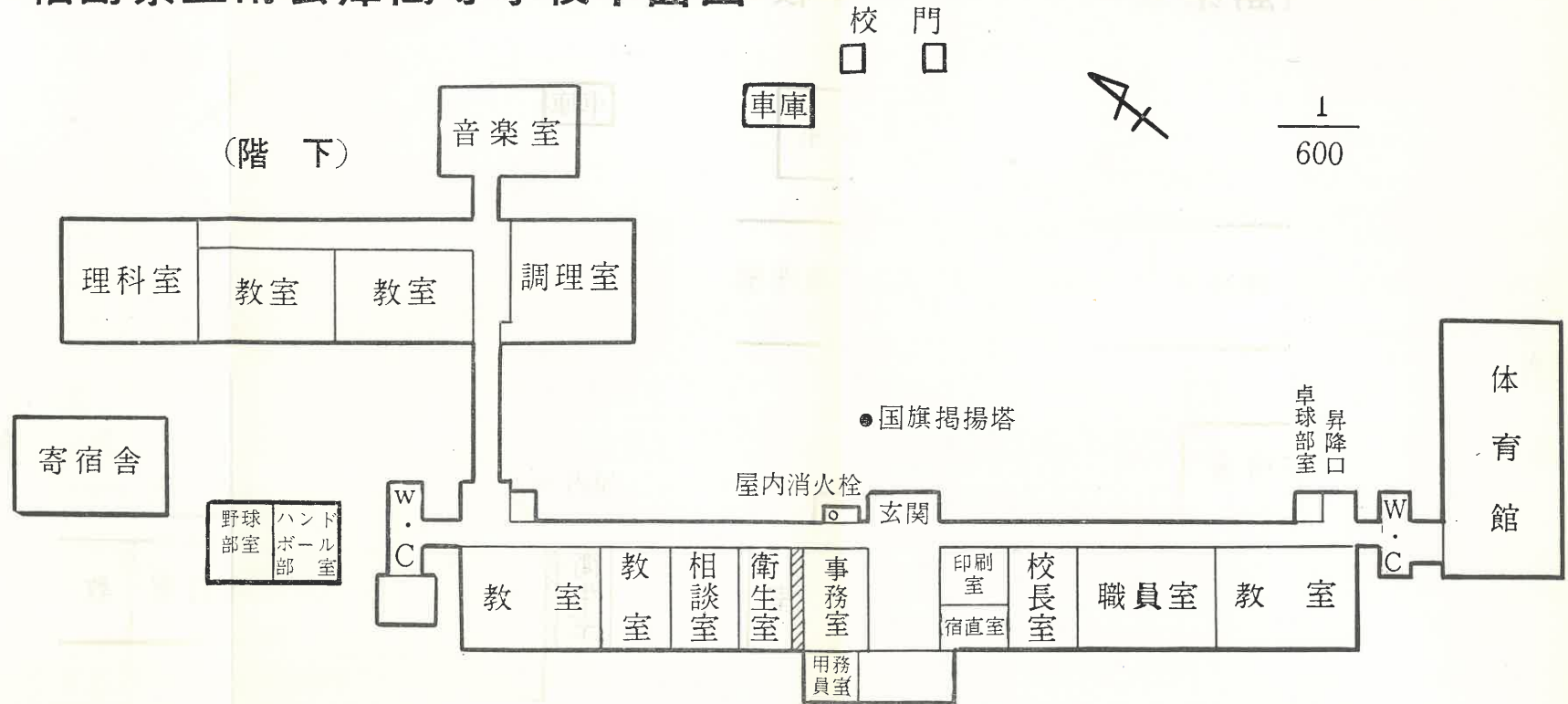
昭和四十三年九月十日 印刷
昭和四十三年九月二十日 発行
【非売品】
編集人代表 金沢厚四
発行人 橋本秀夫
印刷所 丸八商店
印刷者 佐藤彦八
発行所 福島県立南会津高等学校

福島県立

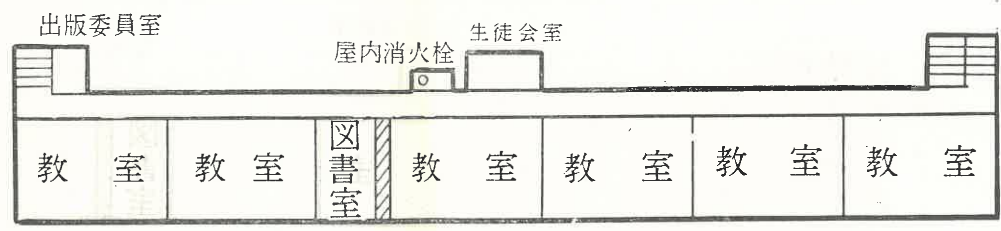


校地校舎 〇
 学校敷地 12591.71
 運動場 12847.69
 建坪..... 校体育宿
 物.

福島県立南会津高等学校平面図

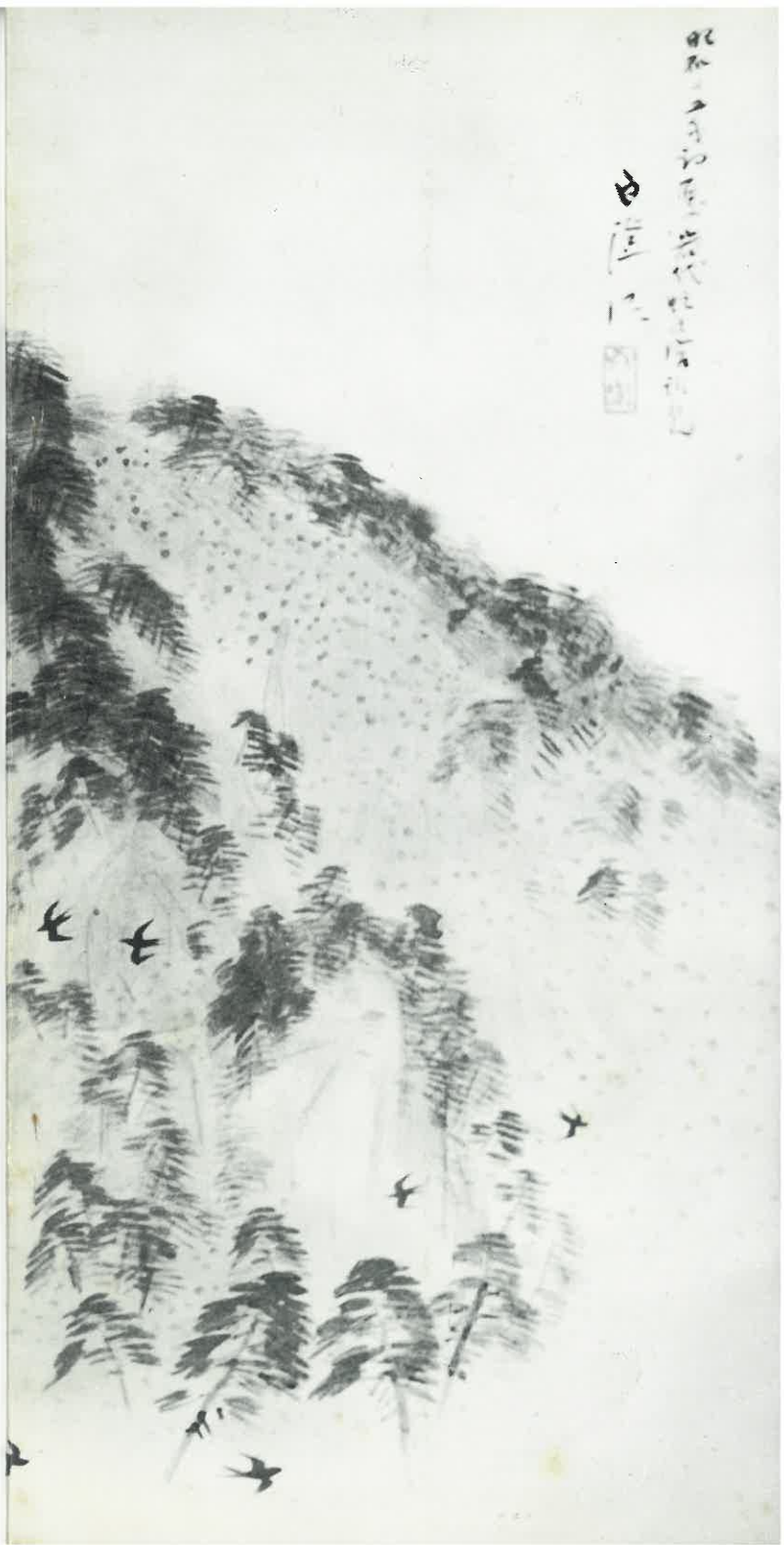


(階上)



校地校舎の概要

学校敷地	12591.71m ²
運動場	12847.69m ²
建坪……	校舎 1731.07m ²
	体育館 704.58m ²
	寄宿舎 691.72m ²
	物置 33.05m ²



白雲山
丁巳年
畫

